

## 〈政治的なるもの〉と「復興」 ——ラクラウとムフの「敵対性」概念から考える\*——

郭 基煥

「復興」とは何かというイメージは多様であり、またその現実についての評価も様々であるが、一般にその概念は「復旧」との関連で、その「あと」、あるいは「先」にあるものとされている。その場合、「復旧」は通常、復興のイメージについてそうであるようには、議論が分かれることは少ない。「復旧」については、共有されたイメージがあり、それに向かって、どのような仕方で、またどのように早く達成していくかという、いわば技術的な面が問題になる。しかし、共有されている復旧のイメージが、災害前の「日常」を可能にしていた諸条件を回復させることを意味する限りでは、それは、原理的に不可能な面を持つ。失われた命は戻らない。かけがえのない人との失われた関係性はかつての形には決して戻らない。この意味では「復旧」は技術的な問題にとどまらず、原理的な問題を抱えている。ライフラインが戻ったことを喜んでいいるときに、そのことよりも深刻な問題を抱え込んでいる誰かがいることは容易に想像しうる。つまり、「復旧」とは別の何かを志向している生を想像しうる<sup>1</sup>。また、「復旧」以外の志向性は、かけがえのない誰かを失った人のうちでのみ生じるものでもない。「災害時ユートピア」と言われる局面において、私たちは災害前の日常とは隔絶した志向性を経験する。等価交換ではなく、贈与の連鎖としての社会経験である(郭2015)。私たちは、その局面において、それ以前の日常からの断絶を経験している。日常とは隔絶した、あるいはその根源にあるような何かを志向する。

以上のことは「復旧」が一つの社会的選択であることを意味する。つまり、「復旧」に注力することは、(災害前の)所与の条件を回復するという一つの選択であり、それ以外の志向性に基づく何かを選択しないことに他ならない。災害前とは違う何かを志向する社会の在り方や生き方を選択しないこと、所与の条件を回復するのではなく、それ自体を変更する志向性の棄却を意味する<sup>2</sup>。

\* 本稿は日本現象学・社会科学会第35回大会「シンポジウム」(「震災以後の東北を生きる：その経験を記憶し記述するという事」)で発表した原稿に若干の修正を加えたものである。修正は書誌情報の追加や語句の修正、文意を明確化するための若干の例の追加に留めてある。時間の制約の厳しいシンポジウムであったため、またその最後の発表であったため、その後のフロアとの議論が活性化しよう主要な論点を明示すること、および問いかけを発することを主眼にして書かれたものである点、ご理解いただければ幸いである。

<sup>1</sup> たとえば、亡き父が営んでいたうどんの味を再現することを自分の希望として語る「被災者」として、現実とは何か。その人の「現実」はその人が直面している生活の困難であろうか。決して見ることのできない亡き父もまた、あるいはその不在の父こそ本人にとっての「現実」であり、父の味の再現は、この意味での現実へのひとつの応答ではないか。こうした「救済的志向」は、「復興」はおろか、ときに「復旧」のロジックとさえ、どこかで衝突する(郭2012)

<sup>2</sup> 災害時においてしばしば発生し、東日本大震災においても発生したところの「災害時ユートピア」といわれる特別な共同体——上述の言い方をすれば、贈与の連鎖としての社会経験——において、いわばたたき起こされる「愛」は復旧のプロセスと共に自然に眠るものだろうか。むしろ、復旧のプロセス、あ

一般に私たちは「復旧」を選択の問題とは考えない。それは当然であり、必然的なものと考えがちである。この意味では、「復旧」は最初からある種の暴力性を帯びている。一つを選択であるものが、そうではなく、選択以前の自明的、普遍的なものとして現れるとき、それ以外の選択肢（への志向性）は、社会内に場所を持ちえないからである。

そうであれば、「これが復興か」「誰のための復興か」と問い、あるいは復興とは何かと問う問いは、復興がいわば「復旧」のプラスアルファとして表象されている限りで、「復旧」を選択したことの問題へと遡って考えることができる。

所与の条件を回復する（そのうえで、さらなる何かを求める）ということではなく、所与の条件を変更するという方向に、震災後の社会の可能性を考えることはできないか。

ラクラウとムフによれば、一般に私たちが「社会」と呼んでいるものにおいて「敵対性（antagonism）」が消えることはない<sup>3</sup>。この論者たちと共に、「敵対性」の抹消不可能性を認めるのであれば、社会を一つの全体として表象すること（典型的にはコーポラティズム的な社会観）、またその表象に基づく諸実践や制度はそれ自体、暴力性を帯びることになる。したがってむしろ、「社会」に遍在する「敵対性」を対自的に明確化し、「政治的なもの（the political）」の次元を切り開くこと、「闘技的闘争（agonistic struggle）」を活性化することこそが、「活気に満ちた民主主義的な生活」の条件になる。ここでは、このような、ラクラウやムフのラディカルデモクラシーの基本的な発想をいったん受け入れ、これらの概念を通して、震災以降の「日本社会」を考えてみたい。

災害は一般に対自化されていなかった敵対性を顕在化させたり、新しい敵対性を構成する危機／機会でもある。

災害はそれ以前の社会における脆弱性を拡大し、顕在化することはしばしば言われる。例えば経済的、社会関係的、象徴的、「身体的」等の資源の多寡が震災後の避難や暮らしの立て直しの成否、したがって被害の程度を大きく規定するが、仮に、こうした資源の多寡を新

---

るいはそれに対する自明視されたイメージ、さらにはそのイメージを支える資本主義という経済的な仕組みこそが「愛」を眠らせるのではないか（郭 2015）

<sup>3</sup> ラクラウとムフにとって社会は、その領域を最終的に縫合することができず、「不可能」である。というのは、端的にはどのようなアイデンティティもそれ自体としてではなく、節合実践の結果として（そのヘゲモニー化と沈殿によって）、したがって、当の言説内の位置（契機 moment）として生じると見なされるからである。節合されていない差異としての要素（element）がある限り、そのアイデンティティは常に偶然的であることを避けられない。したがって、固定的な差異の体系としての社会は不可能であり、——単に一定の物理的な意味での境界内に人が複数、存在しているという事実をもって、社会がそこにあるというのではなく、その複数の存在が何らかの「全体性」を構成しているときに、社会があると言いうるのであれば——「社会はない」。敵対性の概念は、こうした文脈の中で提起される。すなわち、敵対とは、「すべての安定した差異——それゆえあらゆる「客観性」——の最終的不可能性であるような何らかの「経験」である（Laclau and Mouffe 2001=2012: 274-85）。なお、この社会の不可能性をめぐっては、ジジエックはラカンの斜線を引かれた主体という点から、その起源を社会そのものというよりは、主体の側に求める。「外部の敵とは単なる小片、つまり私たちがそのうえに本来的で、内在的な不可能性を「投射し」、「外在化」する現実の残り物である」（Žižek 1990=2014: 373）。またこうした「敵対性」の抹消不可能性にラクラウとムフは「政治的なもの」の可能性を見る。敵対性の中にはらまれている「情念が民主主義の過程における勢力分布内で政治的に動員されるかぎりにおいてのみ、政治過程は存在する」。この回路がないとき、情念はむしろ排外的なナショナリズム等に流れ込んでいく（Laclau 1990=2014; Mouffe 2005=2008）。

自由主義的発想等、何らかの言説で正当化しないとすれば、個々人の回復の違いや被害の程度は容易に「敵対性」へと転換されるはずである。また、先に触れた、災害直後に発生すると言われる「災害ユートピア」的行動も、ある意味で、敵対性を宿していると思えることもできる。すなわちそれが、個人の利害関係への執着や権威主義、形式主義、消費主義等々に見られる志向性とは反対の、あるいは決別の志向性を持つ限り、こうした志向性に執着する勢力の現前は敵対性を構成するだろう<sup>4</sup>。

東日本大震災に限って言えば、原発事故の発生により、実際にも深刻な敵対性を顕在化／構成したことはいうまでもない。ひとつには、避難を余儀なくされた人々、またその人々の苦境を他人事と思えない人々にとって多くの場合、原発を運営、設立させた勢力は敵として現れる。また、反原発運動が技術文明批判と結びつけば、そこにさらなる敵対性が構成される。さらに、原発事故の発生が、被災地の状況を、原発被害を被った被災地域と、それを被らなかった(津波／地震のみの)被災地域という二つに分けたことに着目し(もちろんグラデーションをなしているが)、原発問題が、後者の地域への救援や復旧の遅れや関心の低下をもたらしたとすれば、その地域の被災者は、「原発勢力」と敵対するだろう。

その一方で、震災以降、「結合」がいたるところで強調されてきたことは周知の通りである<sup>5</sup>。「絆」、「頑張ろう、日本」、「日本は一つのチームです」等々の言葉がいたるところで発せられた。こうした言説は、マスメディアにおいてのみ現れていたわけではない。たとえば、森岡卓司が紹介している例(森岡 2014: 120)を挙げれば、高橋ジョージは次のように発言している「僕は被災地へ行ってきましたが、被災された人といろんな話をしてきました。その人たちは「私たちはまだ生きています。生かされています。だから、もっと悲しい人たちがいるから、そっちを助けてください」と必ず言うんですね。その言葉からは、もう政府がどうか、好きだとか嫌いだとかを越えた人間としての思い、そして私たちは亡くなった人たちの分まで生きようという思いが僕には伝わってきました」。森岡はこうした「階層化のフィクション」が「悲惨な状況下に見放された個を内側から支え励まし」、その一方で、「権威の責任には無批判な、ある意味で理想的な共同体のエートスを作るだろう」と述べる。また、それが「言葉の失調」を生むと警鐘を鳴らす(森岡 2014: 115)。「私たちは一つであ

<sup>4</sup> ラクラウとムフが敵対性概念について論じるときの原理的な部分(「社会」なるものに回収不可能であるところの「要素」、あるいは逆説的にもレヴィナス的にいえば他者の「無限」こそが、敵対性の条件であるという点)からは、大災害時に生じる敵対性について、ある種の「必然性」を見出すことができる。大災害が、それまでの人の社会的な位置(契機)を失わせる／減じさせる危機／機会であり、人が「要素」そのものとして、また場合／場所によっては「瓦礫」という「要素」そのものに対峙する瞬間を開くものであるとすれば、敵対性にははまれる中核的な情念(「社会がある」こと、秩序そのものに対する「純粹」な敵意)の解放の瞬間として見なすこともできるように思われる。それが、利他性や即時応答性を基軸とする「災害時ユートピア」の「眠りから覚めた愛」(ソルニット)を支えているのではないか。

<sup>5</sup> その結合の呼びかけがもたらしたと結果の一つが、外国人犯罪の流言であると考えられる。筆者が行ったアンケート調査によれば、震災後には、被災地に限らず、特にアジア系の人々(中国人、韓国朝鮮人)が災害に乗じて犯罪をしているという噂が広範に広がり、またそれを聞いた人の圧倒的な割合の人がそれを信じていた。その「汚名化言説」は、統合の呼びかけに内在していた日本(人)の「美名化言説」と相補的な現象と考えられる(郭 2017)。

る」ことを（結果的に）強調する結合の呼びかけは「下」からも発せられていたのである。

既に述べたように、東日本大震災が、他の災害においてもそうであるように（しかも、おそらくは少なくとも日本の戦後のどんな災害よりも、さらに）敵対性を顕在化／構成する危機／機会であったとすれば、社会の諸次元における「結合」の（行為遂行論的な）呼びかけは、穏やかに言えば、可能性としての／現実の〈敵対性〉の一時保留の呼びかけであり、強い言い方をすれば、隠蔽への圧力である。あるいは、それは〈政治的なるもの〉の抑圧でもある。実際、震災直後、新聞では「与野党は一致せよ」との言説が、至極、まっとうな対応として主張されてもいる。

この場合、統合の呼びかけは、様々な形態をとってきた。

典型的な一つは、「歴史／物語」の利用であった。すなわち、多くの場合、「敗戦の焼け野原」を参照点として、また幾多の自然災害等、悲惨な経験を参照点として、「日本はXから復興を遂げてきた」（したがって、私たち日本（人）にはその力がある）と論ずるものである。もちろん歴史物語論が明らかにしてきたように、歴史（叙述）が常に既にそうであるように、この「歴史」の参照は極めて選択的である。原発事故がそれ以前の情報操作（安全神話の植え付け）に問題があったと理解し、それが第二次世界大戦中の「大本営発表」と相似的であると理解すれば、「私たちは再びXを繰り返した」（したがって、私たち日本（人）には悲惨を繰り返す「さが」がある）という形で歴史を参照にすることもできる。いずれにせよ、注意すべきは「復活の物語」がその「主体位置」に日本（という統一体）を置いていることである。

統合の呼びかけの、もう一つの典型的な形態は、「同心円的世界観」ともいうべきものに媒介されたものだった。サンドウィッチマンは「東北なめるな」とブログに書いたとき、それで文を締めくくるのではなかった。「日本なめるな」との一文を直続させている。この東北と日本の「短絡」は東北があり、それを包み込むものとして日本が（さらに、それを包むものとして世界が）想定され、東北は日本という全体の中でそれと同期的に連動（シンクロ）する一部分として想定されている。ここには、「東北地方」（それ自体、象徴的／歴史的に構成されたものであるが）と「日本」もしくは「中央」との歴史上の明白な敵対関係や、現在も続く経済的な従属的な関係は捨象されている。同型的な言説は追悼式の首相の追悼文（後述）や復興構想会議の「東北の復興なくして日本の再生なし」という謳い文句にも見られる。

こうした統合の呼びかけは、非常事態という特殊な条件の故に生じたものであるという見方、また、そうであるが故に、それが被災者や支援者の意志を鼓舞する機能に着目して正当化する考え方もあるだろう。しかし、このことを考えるには、いくつかのことを先に確認しておく必要がある。

ひとつには、振り返って考えてみれば、「政治的なるものの」が震災前から縮小の傾向にあったことは明らかだという点である。いわゆる政治的無関心という長期的に見られていた状況である。「政治的なるもの」を実際の政治の場に持ち込む回路は相当、長期に渡って、絶たれていた現実がある。

次に、統合を呼びかける政治が現在も続いていることである。東京五輪を招致する際に用いられた、「復興した姿を世界にお見せする」という論理は明らかに倒錯しているが、ここで注意すべきは、この語りにおいて、想定されている主語／主体が日本（人）であるという点であり、同じ主旨のもとで聖火リレーのコースは設定されている。また、東日本大震災の政府主導の追悼式では、一周年目に「我が国の繁栄を導いた先人たちは、危機のたびに、より逞しく立ち上がってきました。私たちは、被災地の苦難の日々に寄り添いながら、共に手を携えて、「復興を通じた日本の再生」という歴史的な使命を果たしてまいります」というフレーズが現れたが、その後も、判でおしたように、同じフレーズが踏襲されている。今年「我が国は幾度となく、国難と言えるような災害に見舞われてきましたが、その度に、勇気と希望をもって乗り越えてまいりました。今を生きる私たちも、先人たちに倣い、手を携えて、前を向いて歩んでまいります」である<sup>6</sup>。

最後に、ジジエックによれば、ラクラウとムフの議論を受け入れて言うように、敵対性が抹消不可能なものである限り、それを偽装する「敵対的分割」によって引き裂かれてない社会のビジョン、典型的にはコーポラティズムのビジョン（イデオロギー）は、それを維持するために、つまり、敵対性の「現実」とイデオロギーの間隙を縫うために、あるいは「現実」を覆い隠すために、「健全な社会組織に腐敗を持ちこむ外的な要素であり異物」という社会的空想を生む（Žižek 1989=2000: 198）。ジジエックの議論、すなわち社会は統合されている、または統合された社会を私たちは生きているというイデオロギーが必然的に異物という空想を生むという議論が一般的に妥当性を持ちうるかどうかを実証的に明らかにすることは難しいかもしれない。が、当面、「美しい日本」を標榜する政権の元で次々に「異物」（「在日」、「反日」、「朝日」、「パヨク」……）が産出されていることは否めないだろう。「民主主義的な政治的アイデンティティの相違間における現実的対決をともなった動的な民主主義的生活を欠くとき（＝要するに、闘技的闘争を欠くとき——引用者註）、その領域は、帰属意識の他の形態、つまり民主主義的なプロセスによっては制御されえない敵対関係の出現を導くような民族的、宗教的もしくはナショナリスト的な性質の帰属意識の場となってしまう」というムフの指摘は現に今、起こっていることを写している。闘技的闘争の情動（passions）がそのはけ口を「原理主義的な運動に見出す傾向にある」（Mouffe 2002: 249）。

以上のように、震災直後に集中的に発せられた、危機への応答である統合の呼びかけが、同時に、震災前から現在に至るまで継続しているところの「政治的なるもの」の閉鎖の呼びかけの系列の一つであり、現に空想上の異物を産出し続けているとすれば、私たちは「政治

---

<sup>6</sup> 追悼式はもっとも高いところに国旗という統合のシンボルが配置され、壇上には唯一、皇族が座するという配置である。岩手宮城福島のご遺族代表がスピーチを行っているが、式ではもちろん、誰も中央—東北の歴史的／現在の敵対性を表明することはなく、「支援者」への感謝を述べている。もっとも遺族の誰も「日本の再生」に言及してはいないこと、「権威」と遺族の間にある、その断絶は注目に値する。政府主催の追悼式については、内閣府ホームページを参照した（<https://www.cao.go.jp/shinsai/index.html>）。

的なるもの」を開くこと、従って敵対性の対自化ということの意味を考え直す必要があるのではないか。言い換えれば、「政治的なるもの」の閉鎖の力学という所与の条件を変更する可能性を考えてもいいのではないか。

震災以降、私たちは様々な場で合意形成の困難に遭遇している（防潮堤の問題や、震災遺構の問題、原発再稼働の問題などなど）。こうした困難について、「政治的なるもの」という観点から見た場合、どうか。

合意形成の困難とは、むしろ闘技的対決の実践であり、隠されていた／見つかっていなかった敵対性の構成であると考えられることができる。そうであれば、たとえば研究者が関わる仕方は、その場における合意をゴールにそのための解決の糸口を提示したりすることに限られるわけではなく、合意を阻む情念を称揚し、ラクラウとムフが言うような「等価性連鎖」の可能性を探ること、すなわちその場での闘技的対決とは別の場におけるそれとを連結させる方法を構想することも考えられるのではないか。

また「地域の復興」や「再生」についても、同じ観点から考えてみたらどうか。「地域」をどの程度の規模のものを想定するにしても、その場合、「心ひとつに」というコミュニタリアン的な原理、したがって統合や同一性という社会構成原理が基軸になっているように思われる。しかし、問題は心を通わせることか。むしろ、心を通わせられない敵を明確化することではないか。「その対立に合理的な解決をもたらすことなど不可能と知りつつも、対立者の正当性を承認しあう関係性」(Mouffe 2005=2008: 38)の中で、その「対抗者 (adversary)」と闘技的対決を試みること、さらには別の場において同じ対決を試みている勢力と連結すること、そしてそのためにまず「何のために闘っているのか知る必要がある、いかなる種類の社会を打ち立てたいのかを認識する必要がある」(Laclau and Mouffe 2001=2012: 34- 35)

情動を抑え込むのではなく、むしろそれを資源に闘う方向を探ること。そのうえで等価性連鎖を試みていくこと。たとえば、被災地に流入するショックドクトリン的な資本の力を抉り出して闘う、その闘いを沖縄における基地をめぐる国家権力との闘いと連結させていくこと、あるいは在日コリアンに対するヘイトスピーチへの闘いと連結させていくこと。ネーションの地理的／象徴的な辺境で起こっている闘いと繋がっていくこと。こうしたプロセスまたは「運動」を「復興」と呼ぶことがふさわしいかどうかはわからないが、それなくしては「生活世界」の場としての当の「地域社会」そのものが空疎化するのではないだろうか。

## 文献

- 郭基煥、2012、「「現実を見ること」と「現実に見られていること」『震災学』創刊号、96-107。  
——、2015、「「冬眠から覚めた愛」は自然に眠るのか」——災害ユートピアの継承可能性『震災学』6号、226-244。  
——、2017、「震災後の『外国人犯罪の流言』」『震災学』10号、184-227。  
森岡卓司 2014、「他者としての『言葉』——東日本大震災後の言語状況と戦後批評を巡る試論」、『山形大

学人文学部研究年報』11号.

Laclau, Ernesto, 1990, *New Reflections on the Revolution of Our Time*, Verso. (山本圭訳、2014、『現代革命の新たな考察』法政大学出版会).

Laclau, Ernesto and Mouffe, Chantal, 2001, *Hegemony and Socialist Strategy: Towards a Radical Democratic Politics*, London: Verso. (西永亮・千葉眞訳、2012、『民主主義の革命：ヘゲモニーとポスト・マルクス主義』筑摩書房).

Mouffe, Chantal, 2002, 「闘技的公共空間に向けて」(千守隆夫訳、『立命館産業社会論集』37巻4号(報告原稿)).

———, 2005, *On the Political*, London: Routledge. (酒井隆史監訳、2008、『政治的なものについて：闘技的民主主義と多元主義的グローバル秩序の構築』明石書店).

Žižek, Slavoj, 1989, *The sublime object of ideology*, Verso. (鈴木晶訳、2000、『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社).

———, 1990, *Beyond discourse-analysis*, Laclau, Ernesto, 1990, *New Reflections on the Revolution of Our Time*, Verso. (山本圭訳、2014、「言説一分析を超えて」、『現代革命の新たな考察』法政大学出版会、369-385).

(かくきかん・東北学院大学)